

もう少し、もらって おけば良かった!

上岡 実弥子

この一年、実家にちよくちよく帰っていました。

実家に帰る楽しみは、家族と話すことです。皆の近況を聞いたり、こちらの近況を話したりすると、気持ちがあほ

こりします。甥や姪がどんどん大きくなるのも楽しみです。

加えて、帰省で楽しみなのは「野菜がもらえる」ことです。

私は、好き嫌いなく何でも食べますが、ひととき野菜が好きです。お酒のアテにかぼちや煮や、ぶり大根など、最高ですね!

そこで、帰省の際は「なんでもいいから野菜ちょうだい♪」とねだります。

実家は専業農家。食べる野菜は、おおかた自分で作りま

す。加えて、親族から頂く野菜が、これまた充実しています。

「〇〇の大根だぞ」

「〇〇のアスパラだに。『実弥子ちゃんに持たせてやって』って持って来てくれたぞ」

など、親戚が気づかってくれるのも有難い限りです。

加えて、これらの野菜が、こちらで買う野菜とはくらべものにならないほど、美味しい。

「ちよつとオ!こないだもらつてった大根、すつごく美味しかった」

「ありやあ、〇〇で作った大根だわ」

「へえ、〇〇じゃ、大根を出荷してるの?」

「しとらんよ」

「えっ? 売り物でもないのに、あんなに美味しいの?」

「そういうことが、頻繁にあります。」

帰省の際は、夫の車で行くので、野菜はしこたま頂きたいところ。が、悲しいかなオトナ二人の所帯では、そんなに食べられません。さらに、日頃、『白菜4分の1カット』など、食べる量だけ買うチマチマした生活を送っていると、

「捨てたらもったいない」と

いう考えが邪魔をして、大量にもらえないのです。先日も、

「なんだえ、それしか持つてかんのかえ。はりこみ悪いなえ」

と嘆く親を尻目に、食べられる分量の野菜をもらいました。帰宅後、食べたところ、そのみずみずしくて美味しいこと!

「やっぱり、もう少しもらつておけば良かったぞ」

「そうずらら」

そんな会話を、帰省のたびに繰り返しているのです。

株式会社キャラウィット代表取締役



NHKの大河ドラマ

真田丸の見どころ

唐木 淨治

今年のNHK大河ドラマは「真田丸」に決まり、平成28年1月から毎週日曜日の午後8時からスタートされました。この真田丸によって、信州上田城を三代の真田一族が守り

続けた伝説の物語であります。とくに、大阪の冬の陣と夏の陣で徳川家康と戦った「日の本の一のつわもの」と云われ、

その名を天下にとどろかした真田幸村の生きざまを垣間みることが出来ます。

とりわけ、戦国時代の荒波に武田信玄・織田信長・上杉謙信・徳川家康などの大國の武將に囲まれていた信州信濃の小国であるが故に真田一族

の力強い絆と、家来の真田十勇士の結束によって、信州人特有の気質がよりよく育ぐく

まれてきたと云われています。この信州人特有の気質の原点

が、高遠藩の学問所として設

立された「進徳館」(しんとくかん)にあると云っている信州人が多いようであります。

ところで、この進徳館は、文政時代の高遠藩主の内藤頼直が実際に役立つ学問と人材育成をむねとした「知行合一」

の教育をめざして、高遠城内にあった内藤蔵人の屋敷を改造して藩の学問所として開設されたようであります。

そして、この高遠藩主の保科正之(ほしなまさゆき)が設立した際に高遠藩内から多くの藩士を引きつれて会津若

松の3万石の大藩へと移封され、その後「保科」の姓から「松平」姓を名乗りましたことと、その後白虎隊の若も

のの自決と、藩士の自がいによって明治維新を迎えることになったことは、多くのテレビや映画などのドラマによつて語りつがれております。

このように真田一族も武田信玄・勝頼親子の血縁関係にあつたことによつて、信州人の気質も育ぐくまれて真田一族の結束の絆を生んだことが

理解されたものと思えます。